

1 吾輩は猫である。

吾輩は猫である。

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたかとうと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番癡惡な種族であつたそうだ。この書生というのは時々我々を捕えて煮て食うという話である。しかしその当時は何という考もなかつたから別段恐しいとも思わなかつた。ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあつたばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものの見始であろう。この時妙なものだと思つた感じが今でも残っている。第一毛をもって裝飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで葉缶だ。その後猫にもだいぶ逢つたがこんな片輪には一度も出会わした事がない。のみならず顔の真中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々ぷうぷうと煙を吹く。どうも咽せぼくて実に弱つた。これが人間の飲む煙草というものである事はようやくこ

の頃知った。

この書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐っておったが、しばらくすると非常な速力で運転し始めた。書生が動くのか自分だけが動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が悪くなる。到底助からないと思っていると、どさりと音がして眼から火が出た。それまでは記憶しているがあとは何の事やらいくら考え出そうとしても分らない。

ふと気が付いて見ると書生はいない。たくさんおった兄弟が一疋も見えぬ。肝心の母親さえ姿を隠してしまった。その上今までの所とは違つて無暗に明るい。眼を明いていられぬくらいだ。はてな何でも容子がおかしいと、のそのそ這い出して見ると非常に痛い。吾輩は藁の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

ようやくの思いで笹原を這い出すと向うに大きな池がある。吾輩は池の前に坐つてどうしたらよかろうと考えて見た。別にこれという分別も出ない。しばらくして泣いたら書生がまた迎に来てくれるかと考え付いた。ニャー、ニャーと試みにやって見たが誰も来ない。そのうち池の上をさらさらと風が渡つて日が暮れかかる。腹が非常に減つて来た。泣きたくても声が出ない。仕方がない、何でもよいから食物のある所まであるこうと決心をしてそろりそろりと池を左りに廻り始めた。どうも非常に苦しい。そこを我慢

3 吾輩は猫である。

して無理やりに這^はって行くとうやうやくの事で何となく人間臭い所へ出た。ここへ這入^{はい}つたら、どうにかなると思つて竹垣の崩^{くず}れた穴から、とある邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もしこの竹垣が破れていなかったなら、吾輩はついに路傍^{ろぼう}に餓死^{がし}したかも知れんのである。一樹の蔭とはよく云^いつたものだ。この垣根の穴は今日^{こんにち}に至るまで吾輩が隣家^{となり}の三毛を訪問する時の通路になつてゐる。さて邸^{やしき}へは忍び込んだもののこれから先どうして善^いいか分らない。そのうちに暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降つて来るといふ始末でもう一刻の猶^{ゆうよ}予が出来なくなつた。仕方がないからとにかく明くるて暖かそうな方へ方へとあるいて行く。今から考えるとその時はすでに家の内に這入つておつたのだ。ここで吾輩は彼^かの書生以外の人間を再び見るべき機会に遭遇^{そうぐう}したのである。第一に逢つたのがおさんである。これは前の書生より一層乱暴な方で吾輩を見るや否やいきなり頸筋^{くびすじ}をつかんで表へ抛^{ほう}り出した。いやこれは駄目だと思つたから眼をねぶつて運を天に任せていた。しかしひもじいのと寒いのはどうしても我慢が出来ん。吾輩は再びおさんの隙^{すき}を見て台所へ這^はい上^{あが}つた。すると間もなくまた投げ出された。吾輩は投げ出されては這い上^{あが}り、這い上^{あが}つては投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返したのを記憶している。その時におさんと云う者はつくづくいやになつた。この間お

さんの三馬を偷んでこの返報をしてやってから、やっと胸の痞が下りた。吾輩が最後につまみ出されようとしたときに、この家の主人が騒々しい何だといいながら出て来た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けてこの宿なしの小猫がいくら出しても出しても御台所へ上つて来て困りますという。主人は鼻の下の黒い毛を撚りながら吾輩の顔をしばらく眺めておったが、やがてそんなら内へ置いてやれといったまま奥へ這入ってしまった。主人はあまり口を聞かぬ人と見えた。下女は口惜しそうに吾輩を台所へ抛り出した。かくして吾輩はついにこの家を自分の住家と極める事にしたのである。